

サロベツ再生通信 2011.4発行 第12号

上サロベツ自然再生協議会運営事務局

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク
豊富町
環境省北海道地方環境事務所
北海道開発局稚内開発建設部
北海道宗谷総合振興局稚内建設管理部

第4期上サロベツ自然再生協議会からのご挨拶

第4期上サロベツ自然再生協議会が本年2月よりスタートし、協議会会長・会長代理、再生普及部会及び再生技術部会の座長・座長代理が選出されました。そこで、梅田協議会会長、辻井再生普及部会座長、井上再生技術部会座長へ本紙への執筆をお願いしたところ快く、引き受けて頂きました。



「上サロベツ・豊富を交響体として」

梅田 安治

東日本大震災で被災された皆様にかかるのお見舞いと哀悼の意を表します。その被災の始末、復興に向かつての大変な状況の中で、静穏にして秩序ある生活・活動について諸外国から感歎賞賛されていることに、いささか誇らしさを感じ、「絆」と「分かち合い」を再認識させられるのです。風土文化としてのこの「絆」と「分かち合い」を人々との間だけでなく、身のまわりのもの、自然との関係にも持っているのではないだろうか。

上サロベツ・豊富の人と集い来る人、そして自然・湿原と農地・農業は泥炭地という基盤を共有する「絆」で連帯し、その持続のためには「分かち合い」が必須条件である。その場所としての泥炭地こそ掛け替えのない上サロベツ・豊富の地域資源なのです。その地域資源も地域の人々の支えがあってこそ持続が可能なのである。共同体としての地域の人々は農業を主とする生活を成立させ、外からの人々も交えて交響的に自然と共生していくことが地域資源の活用であり保全持続なのです。そのエネルギーは共同体としての地域が外部の人々も交えての「絆」「分かち合い」から交響体となり、自然と農業との交響的共生状況を形成することでしょう。



「サロベツ湿原センター・オープンに寄せて」

辻井 達一

サロベツ湿原の研究調査は、世界的にも他に例を見ないほど、長期にわたっています。1950年代からですから既に半世紀を超えて60年余りになりました。自然と農業との両立を目指している点では今でいう賢明な利用の典型的な例だと言えるでしょう。ただ、それが期待通りに進められて、確かなワイズユースの例になるかどうかは、なお、注意深く見守らなければならないと思います。

自然再生普及部会は、これからもさまざまな知恵を集め、それを行動に移して、この例の無いほど続いている”湿言との付き合い“を確かなものにしていくべきでしょう。

新しい湿原センターがオープンしました。このセンターは、多くの人たちの湿原への関心を高め、目を向けるための拠点となるでしょうが、それを活かして使うことが大切です。普及部会はその役割を果たしたいと思います。



「技術部会の座長就任にあたって」

井上 京

第4期の再生技術部会の座長を仰せつかりました。サロベツにはできるだけ足繁く通っているつもりではおりますが、地元にお住まいの皆様と比べればいかほどもありません。

知らないこと、気づかず見逃していることが沢山あるように思っております。皆様がお持ちの知見と知恵が集まることによって、上サロベツの自然再生はより価値あるものになると信じております。どうぞよろしくお願いいたします。

第13回再生技術部会の開催

平成23年3月17日（木）13:30から豊富町民センターにおいて第13回再生技術部会が22名の出席者によって開催されました。この中で、座長に井上京氏、座長代理に村元正己氏が選出されました。

議事の中で、環境省北海道地方環境事務所（水抜き水路堰き止め工の経過）、北海道開発局稚内開発建設部（緩衝帯実証試験実証について、沈砂池モニタリングについて）から報告がありました。これに対し参加者からも様々な質問や意見がだされ、活発な意見交換がされました。

次回は、6月～9月の間に開催しますので、たくさんの方の参加をお待ち申し上げます。



義援金のお礼

技術部会の終了後、井上座長のご提案で東日本大震災の被害を受けた方への義援金を集めるため、技術部会の参加者に募金を呼びかけることとなりました。集まった義援金は37,300円。そのうち、7,000円は東北地方への支援物資購入に使い、残りの30,300円は「東日本大震災義援金政府窓口」に「上サロベツ自然再生協議会技術部会」名で寄託しました。ご協力いただきました皆様、どうもありがとうございました。

東日本大震災で亡くなられた方に哀悼の意を表すとともに、大きな被害にあわれた方々が早く元の生活に戻れることをお祈り致します。

（事務局）